

名古屋大学附属図書館2012年秋季特別展
ホームカミングデー特別企画

時を超える 贈り物

世界のなかの日本、



日本のなかの世界。

10月20日(土)

名古屋大学豊田講堂 1階アトリウム

10月23日(火)~11月6日(火)

名古屋大学中央図書館 4階展示室

名古屋大学附属図書館 2012年秋季特別展
ホームカミングデー特別企画

時を超える贈り物

発行日 2012年10月20日
編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町B3-2(790)
TEL:052-789-3678(受付) FAX:052-789-3694

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>

©名古屋大学附属図書館

広い世界の中において、「日本」というひとつの国の姿は、当時の人々の目にどのように映っていたのでしょうか。また、そのころの日本各地の町並みや、そこで営まれる日本人の暮らしはどのようなものだったのでしょうか。古地図・浮世絵に残された日本の姿をご紹介します。

1. 『改正日本輿地路程全圖』長久保玄珠（神宮皇學館文庫）

1 舗 浪華 安永8年（1779）※10月20日（土）豊田講堂においてはパネル展示

2. 『新刻日本輿地路程全圖』長久保玄珠

1 舗 浪華 弘化元年（1844）※10月20日（土）豊田講堂においてはパネル展示



1. 改正日本輿地路程全圖



2. 新刻日本輿地路程全圖

3. 『日本図』ルイス・ティセラ

1 枚 出版地不明 1595年以降刊 銅板（手彩）
Iaponiae insulae descriptio. [S.l.], [s.n.], [ca.1595].

ポルトガルのイエズス会士で地図製作者である、ルイス・ティセラ（Teixeira, Luís, 1560-1604頃）が作成した地図。オルテリウス（Ortelius, Abraham, 1527-1598）が編集した地図帳『世界の舞台』1595年版に収録された。西洋で作られた地図の中で日本が独立して現れた最初の地図とされ、17世紀半ば頃まで使われた。裏面にはマフェイ（Maffei, Giovanni Pietro, 1536?-1603）の『インド史』（1588）からの引用による、日本の国情や日本人の国民性、風俗、宗教などについてのテキストが付されている。



名古屋大学附属図書館が
これまで収集してきた貴重な資料や
この地域に残された史料から
世界における日本の姿を紹介するとともに
名古屋というこの地域から
未来へのメッセージを読み解きます。

図書室名の注記がないものは、すべて名古屋大学附属図書館中央
図書館所蔵です。



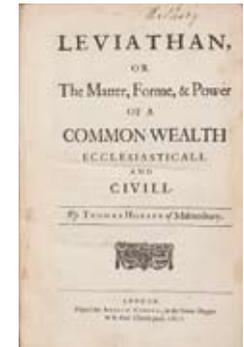
西洋では18世紀初頭に、それまでの宗教的権威に対し、人々が持つ理性に光を当てる啓蒙の時代が到来しました。社会科学分野に見る新たな知は、いったいどのようなものだったのでしょうか。

6. 『リヴァイアサン』 トマス・ホブズ

初版（Head版） ロンドン 1651

Leviathan, or, The matter, forme, & power of a common-wealth ecclesiasticall and civill. London, Printed for Andrew Crooke, 1651.

啓蒙思想の先駆的役割を果たしたホブズ (Hobbes, Thomas, 1588-1679) は、イギリスの政治哲学者で、オックスフォード大学卒業後、第2代デヴォンシャー伯の家庭教師となる。ホブズの著書である『リヴァイアサン』は、国家を『旧約聖書』に出てくる海の怪獣リヴァイアサンにたとえて書かれた国家論で、4部で構成されている。



前半の第1部「人間について」(Of man) で人間学、第2部「コモンウェルスについて」(Of commonwealth) で政治学、後半の第3部「キリスト教のコモンウェルスについて」(Of a Christian commonwealth)、第4部「暗黒の王国について」(Of the kingdom of darkness) で宗教論（聖書解釈）をあつかっている。

銅版の扉絵（写真左）は、左手に笏（教会権力）、右手に剣（国家権力）を握る王の姿をしており、その体は無数の小さな市民で描かれているが、その解釈には諸説がある。

『リヴァイアサン』には同じ出版事項を持つ三つの版があり、判別方法の一つとして標題紙（写真右）の印刷商標がある。本書の商標は翼のついた顔、花、渦巻き模様、飾り房が描かれたもので、真正の初版とされる。他の版はbear版、ornament版と呼ばれるが、本学は、これら三つの版すべてを2セット所蔵している。

7. 『法の精神』 モンテスキュー

初版2刷 全2巻 ジュネーヴ [1748]

De l'esprit des loix, ou, Du rapport que les loix doivent avoir avec la constitution de chaque gouvernement, les moeurs, le climat, la religion, le commerce, &c., à quoi l'auteur a ajouté. des recherches nouvelles sur les loix romaines touchant les successions, sur les loix françoises, & sur les loix féodales. A Geneve, Chez Barillot & Fils, [1748].

4. 『真景東海道五十三次』 広重画

全1帖 出版地不明 明治期刊



熱田

鳴海

5. 『新世界地図帳』 ヤン・ヤンソン

ドイツ語版 全3巻 アムステルダム 1638-1642

Newer Atlas, oder Weltbeschreibung, und vollkommene Abbildung aller unterschiedlichen Königreichen, Länder und Provinßen, sampt Ost- und West-Indien, davon gnugsam und vollkommener bericht zufinden. Amsterdami, Apud Iohannem Ianßonium, 1638-1642. 3 vols. Vol. 2 has title: Newer Atlas, oder Weltbeschreibung, darinnen viel unterschiedliche Newe und weitläufigte Beschreibungen, mit derselben Taffeln begriffen. Supplement has title: Novi Atlantis, Anhang oder neuer Weltbeschreibung, Dritter Theil, mit viel schönen, neuen, und ausführlichen Land-tafeln in Kupfer gestochen,...

オランダのヤンソン (Jansson, Jan, 1596-1664) は、地図製作者であるヨドクス・ホンディウス (Hondius, Jodocus, 1563-1612) の娘と結婚して、地図を出版するようになった。本書は3巻からなる世界地図で、各巻の構成は次のようになっている。

第1巻 北ヨーロッパ、東ヨーロッパ、ギリシアを除くバルカン諸国、ドイツ及びベネルクス（全124図）

第2巻 南ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカ（全119図）

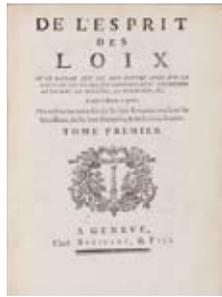
第3巻 補遺（86図を追加）

日本は第2巻のアジアの地図と中国の地図の2か所に描かれているが、日本として独立したものはなく、いずれも北海道は描かれていない。また、1639年の鎖国政策によって日本の情報が伝わりにくくなったため、ティセラの日本図を踏襲している。



第2巻のアジアの地図

フランスの啓蒙思想家モンテスキュー (Montesquieu, Charles-Louis de Secondat, baron de La Brède et de, 1689-1755) はボルドー近郊のラ・ブレードの城に生まれる。ボルドー大学で法律を修めてパリに遊学し、父の死後は故郷にもどり、ボルドー高等法院の評定官 (裁判官)、ついで、伯父亡き後は同法院部長評定官職を相続する。その一方でボルドー・アカデミーの会員として活動し、パリにやってきたペルシア人による書簡体小説の形を取って当時のフランス社会を痛烈に批判した『ペルシア人の手紙』(1721) を出版し、さらに『ローマ人盛衰原因論』(1734) で有名になる。



モンテスキューの著書で、三権分立の考え方を提唱した『法の精神』は20年をかけて書かれ、匿名で出版された。百科全書派のダランベールらに賞賛される一方で、保守勢力や教会勢力からの攻撃を受け、1751年には法王庁の『禁書目録』に加えられた。真正初版は、出版年の記載がないが、ジュネーヴでバリヨ (Barrillot) から1748年10月に出版されたことがわかっている。本書は、出版者名がBarillotと印刷され、rが一字抜けており、実際には1748年にパリで出版された偽版とされる。

8. 『百科全書』 デイドロ、ダランベール等編

[ジュネーヴ版] 全35巻 1751-1780 (i.e. 1771-1780)

Encyclopédie, ou, Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres. A Paris, chez Briasson..., 1751-1780. (i.e. 1771-1780)

デイドロ (Diderot, Denis, 1713-1784)、ダランベール (Alembert, Jean Le Rond d', 1717-1783) を中心に編纂されたフランスの百科事典で、本編17巻、図版11巻、補遺4巻、図版補遺1巻、索引2巻からなる。1745年パリの出版社ル・ブルトンとは他社と協同で、イギリスのチェインバーズ (Chambers, Ephraim, 1680?-1740) 編纂による『サイクロペディア』(1728) の翻訳を企画し、それをデイドロに依頼した。しかし編集を依頼されたデイドロは、共同編集者にダランベールを迎え、多数の知識人と共に独自の新しい百科事典を作成した。全巻の執筆・協力者は最終的には200名を超えた。それまでのキリスト教的な知の体系から脱却し、アルファベット順の配列を採用した。本書の本編第1巻の標題紙では、パリで1751年出版したように読めるが、実際は初版を模して、ジュネーヴで1771年に出版された異本である。



本編第1巻 扉絵

扉絵の中央で光を浴びて立つ女性は「真理」を表す。その右側から「理性」と「哲学」が真理のヴェールをはがそうとしている。「真理」の足元には「神学」がひざまずき、真理の光を上から受けている。真理の左手には「想像力」が真理を美化し、冠を与えようとしている。

9. 『道徳感情論』 アダム・スミス

初版 ロンドン 1759

The theory of moral sentiments. London, Printed for A. Millar ... and A. Kincaid and J. Bell, in Edinburgh, 1759.

10. 『国富論』 アダム・スミス (経済学図書室所蔵)

初版 全2巻 ロンドン 1776

An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. London, Printed for W. Strahan, and T. Cadell, 1776.

11. 『国富論』 クリスティアン・ガルヴェ訳 ドイツ語版 (経済学図書室所蔵)

全4巻 ブレスラウ 1794-1796

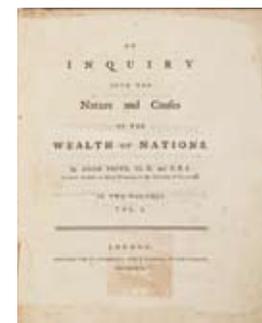
Untersuchung über die Natur und die Ursachen des Nationalreichthums. Breslau, bey Wilhelm Gottlieb Korn, 1794-1796.

スミス (Smith, Adam, 1723-1790) はスコットランドの道徳哲学者、政治経済学者。スコットランドのカーコーディで、関税監督官の次男として生まれる。1737年にグラスゴウ大学に入学し、道徳哲学教授ハチソン (Hutcheson, Francis, 1694-1746) の影響を受ける。1740年にオックスフォード大学に留学するが、大学の学問的沈滞に失望して、1746年に帰郷する。スコットランドの法律家ケイムズ卿 (Kames, Henry Home, lord, 1696-1782) にエディンバラで修辞学・文学などの公開講演をする機会を与えられ、その成功によって母校の論理学教授に招聘された。翌年、道徳哲学講座に転向する。

『道徳感情論』は、グラスゴウ大学で行った道徳哲学講義のうち、主に倫理学についてまとめたもの。『国富論』は、ステュアート (Steuart, James, Sir, 1712-1780) の『経済学原理』とともに最初の経済学体系としてしられ、18世紀中にフランス語やドイツ語などに翻訳された。ドイツに18世紀のイギリス思想をひろめたガルヴェ (Garve, Christian, 1742-1798) による訳は、1776年のシラー (Schiller, Johann Friedrich, 1737-1814) 他訳につづく2番目のドイツ語訳で、原著第4版から訳出された。



9. 道徳感情論



10. 国富論 (初版)



11. 国富論 (ガルヴェ訳)

日本では古き時代からさまざまな物語が作られ、現在まで語り継がれています。その生き生きとした描写から、それぞれの時代を反映した人々の生き方が浮かび上がってくるようです。文学作品を通して、当時の人々が見ていた世界・思い描いていた世界に触れてみましょう。

12. 『源氏物語』 紫式部

版本 30冊 出版地不明 万治3年(1660)



「末摘花」の一節

13. 『平家物語』

版本 12冊 出版地不明 万治2年(1659)

14. 『宇治拾遺物語』

版本 15冊 洛陽 万治2年(1659)

15. 『たけとり物語』

写本 1冊 書写地不明 江戸前期写



13. 平家物語 冒頭部分



14. 宇治拾遺物語
「鼻長き僧の事」挿絵



15. たけとり物語

16. 『伊勢物語絵巻』 亮信筆

卷子本 1巻 書写地不明 書写年不明



17. 『伊勢物語』 (神宮皇學館文庫)

写本 1帖 書写地不明 永禄3年(1560)

18. 『蒙古襲来圖巻』

卷子本 2巻 書写地不明 江戸末期写



19. 『はちかづき』 (神宮皇學館文庫)

写本 2冊 書写地不明 近世前期写



鉢かづき姫

20. 『さごろも』 (神宮皇學館文庫)

写本 3冊 書写地不明 近世前期写

21. 『はまぐり』 (神宮皇學館文庫)

写本 1冊 書写地不明 近世前期写

IV

文字でつたえる：日本の書状

名古屋大学附属図書館の貴重書コレクションの中には、手紙や公文書といった様々な書状も多く含まれています。名家同士で交換された手紙や、政治的文書から、当時の封建社会の姿を見てみましょう。

22. 『徳川家康書状』

五月三日付 若狭少将宛 軸装

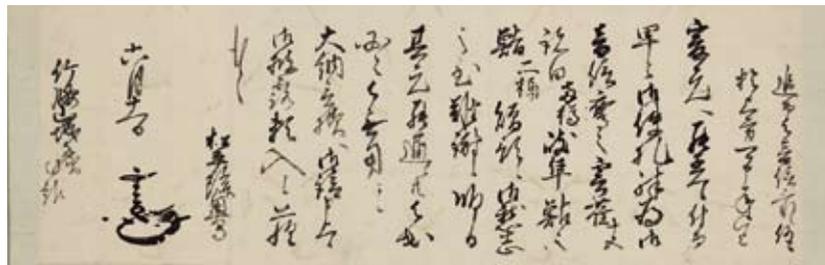


23. 『伊達政宗書状』

六月十一日付 竹腰山城守宛 軸装

贈り物に対する礼状で、「明日、そちらを通りますが、御出迎は御無用です。大納言様（徳川義直）へ御返答を申し上げますので御披露して下さい」と述べたもの。

宛先の「竹腰山城守（正信）」は尾張藩初代藩主徳川義直の異父兄に当たり、慶長17年（1612）には尾張藩の付家老に任命された。



24. 『徳川秀忠自筆かな書状』

江戸初期 卷子装



徳川秀忠本人の筆による、年頭の祝賀三百疋・のし一折に対する返礼状。宛名の「はりま」が誰であるかははっきりしないが、幼少の頃より徳川家康に仕え、天正8年（1580）に徳川秀忠の傅役に命じられて以降秀忠の重臣として活躍し、慶長11年（1606）播磨守に任じられた青山忠成（1551-1613）ではないかとされる。

25. 『徳川義直宛秀忠黒印状』

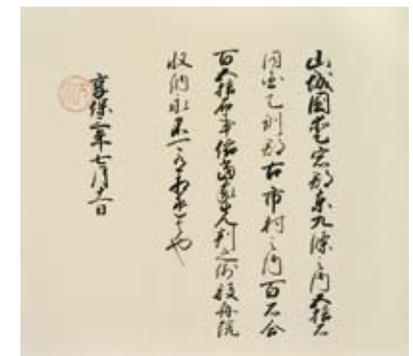
寛永8年（1631）以前 軸装



26. 『徳川吉宗朱印状』

七月十一日付 豎紙 1通

山城国愛宕郡東九條の50石と同国乙訓郡古市村の100石、合わせて150石の朱印地を般舟院（京都市上京区今出川千本東入般舟院前町）に保証する旨を記した文書。般舟院は後土御門院の草創で、もとは伏見にあったが、豊臣秀吉が伏見に築城する際今出川に移った。



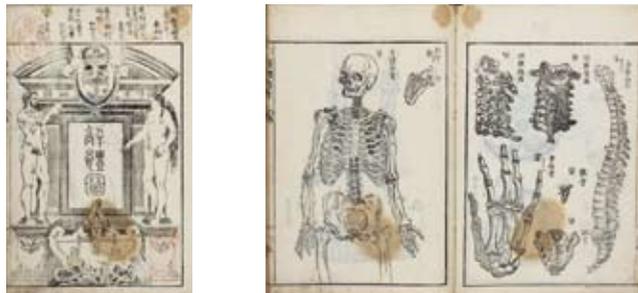
V

世界を知る、世界とつながる：西洋科学の受容

やがて日本は、世界の国々のすぐれた知識や技術に触れ、それらを受容していく時代に入ります。「世界のなか」に自らを置き、他国から刺激を受けつつ新たな知を生み出す、飛躍の時代が訪れたのです。日本の、また郷土の研究者が、世界とつながる様子をご覧ください。

27. 『解體新書』

初版 5冊 東武 安永3年 (1774)



付図「骨節篇図」

28. 『醫心方』 丹波康頼撰

写本 3冊 書写地不明 明治25年 - 明治35年 (1892-1900)



巻第廿二

29. 『子玄子産論』 賀川玄悦

版本 2冊 京師〔京都〕, 大坂, 江戸 安永4年 (1775)



30. 『廣益地錦抄』 (生命農学図書室所蔵)

刊本 8冊 武江〔江戸〕 享保4年 (1719)



巻之七 左「地錦」右「絡石」

31. 『錦窠獣譜』 (伊藤圭介文庫)

稿本 1冊 明治30年 (1897) 頃



31. 錦窠獣譜 「ハクビシン」



32. 錦窠植物図説 第112冊
楊梅譜 「ヤマモモ」

32. 『錦窠植物図説』 (伊藤圭介文庫)

稿本 144冊 明治26年 - 明治30年 (1893-1897) 頃

伊藤圭介は名古屋呉服町の医家の生まれ。長崎に遊学してシーボルトに師事したのち『泰西本草名疏』(1829)を出版し、日本に初めて近代的な植物分類法を紹介した。『錦窠植物図説』は、樹木や植物に関する研究成果や収集した資料などを伊藤圭介が自らまとめた手書き本。植物の掲載順はベンサム (Bentham, George, 1800-1884) とフッカー (Hooker, Joseph Dalton, 1817-1911) が19世紀後半に出版した分類体系にほぼ倣っており、伊藤圭介が西洋の植物分類学と日本の本草学を融合させようとしていたことがうかがえる。

いつの時代も突如としてやってくる自然災害。名古屋大学附属図書館が所蔵する高木家文書等の史料の中には、この地域を中心とした、日本各地で起こった地震・津波の記録が残されています。時を超える贈り物—それは私たちに当時の人々の姿を示すだけでなく、未来の私たちの暮らしへのメッセージをも伝えてくれるものなのです。

● 安政年間の地震災害

33. 『御用日記』(高木家文書)

1冊 安政元年(1854)6月15日条

御用日記は、高木家に生じた公的事件を中心に高木家の家臣が筆録したものである。その中には安政元年6月15日に発生した伊賀地震や、東海地震が近年警戒されるようになった根拠である安政東海地震が起こった時の描写、その被害状況等についての記述も見る事ができる。



34. 『川通御用日記』(高木家文書)

1冊 安政元年(1854)閏7月

35. 『御用日記』(高木家文書)

1冊 安政元年(1854)11月4日条

36. (安政地震被害につき書状)(神宮皇學館文庫 角屋文書)

1通 安政元年(1854)11月9日



安政元年(1854)11月に発生した遠州灘東部を震源とする大地震とそれに伴う津波による伊勢山田辺の被害状況を詳細に報じた書状。名古屋、宇治、津、松坂、鳥羽、熊野などの様子にも言及している。

37. (内匠頭知行所遠州三州村々被災につき書状)(高木家文書)

1通 安政元年(1854)12月

38. 『留守居方日記』(高木家文書)

1冊 安政2年(1855)10月2日条

39. 『江戸大地震并ニ出火場所細見録』(高木家文書)

1冊 安政2年(1855)10月26日



安政江戸地震による出火場所が図示されている

● 江戸時代の災害記録

40. (松平乗邑家中日記覚)(神宮皇學館文庫)

1冊 宝永4年(1707)10月4日条

41. 『松平主殿頭様御在所肥前国島原普賢山温泉山燃出山焼鳴動地震等御届写』(高木家文書)

1冊 寛政4年(1792)4月

42. 『嘉陵雜鈔』(神宮皇學館文庫)

1冊 天保2年(1831)2月3日

43. 『御用日記』(高木家文書)

1冊 弘化4年(1847)3月27日条

44. (信州松代大地震につき届書)(高木家文書)

1通 弘化4年(1847)4月26日

45. 『日記』(高木家文書)

1冊 明治24年(1891)10月28日条